

これからの日本社会と

〈やさしい日本語〉(2)

一橋大学国際教育交流センター教授

庵

功雄



※季刊行政相談166号からの続き

6. 居場所作りのための 〈やさしい日本語〉

このように、〈やさしい日本語〉の研究は、定住外国人への情報提供から始まりましたが、現在では様々な方面に展開しつつあります。そうした〈やさしい日本語〉には二つのタイプがあります。

一つは、成人の定住外国人を対象とし、この人たちが日本社会を居場所と感じられるようになることを目指すもので、「居場所作り」のための〈やさしい日本語〉と

呼んでいます。居場所作りのためには「母語でなら言えることを日本語でも言えるようにする」ことが重要です。

もう一つは、外国にルーツを持つ子どもたちを対象として、子どもたちが高校入学時、遅くとも高校卒業時には、日本人の子どもたちとほぼ同等の日本語力を身につけるために必要な日本語教育のあり方を考えるもので、「バイパス」としての〈やさしい日本語〉と呼んでいます。

初めに、「居場所作りのための

〈やさしい日本語〉について考えます。

定住外国人が、日本社会の中で精神的に安定した生活を送るために必要なことのうち、最も重要なことの一つは、日本社会を自らの「居場所」と感じられることであり、それには、自分が「母語でなら言えることを日本語でも言える」ようになることだと考えられます。これは、私たちが何らかの理由で長期間海外で生活することになった際、自分が言いたいこと、日本語でなら当然言えることを、

その国の言語で言えるようになっていない場合とそうでない場合とで、心理的な安心感がどれほど異なるかを想像すれば、理解していただけるでしょう。

「居場所作りのための〈やさしい日本語〉」には次の三つの側面があります。

- a. 初期日本語教育の公的保障の対象としての〈やさしい日本語〉
- b. 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉
- c. 地域型初級としての〈やさしい日本語〉

6・1 初期日本語教育の公的保障の対象としての〈やさしい日本語〉

第一は、初期日本語教育の公的保障の対象としての側面です。

日本政府が正式に「移民」政策を採った場合、外国人に課す義務として、一定レベルの日本語能力

を求めることが予想されます。これは、外国人が日本で生きていく上での権利を保障するものであり、こうした日本語教育の質を保証するためには、外国人が定住目的で日本に入国する際に、一定量の日本語教育を公的費用(すなわち、税金)を用いて、プロの日本語教師の手で行う必要があります。そして、その内容は、実用的かつ費用対効果の高いものである必要があります。〈やさしい日本語〉の第一の側面は、こうした日本語教育の内容を理論的に考察することにあります。

6・2 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉

第二は、地域社会の共通言語としての側面です。

定住外国人が増えるということとは、地域社会で彼／彼女たちが生活するようになるということでもあります。その場合、地域社会に何らかの共通言語が必要になります。

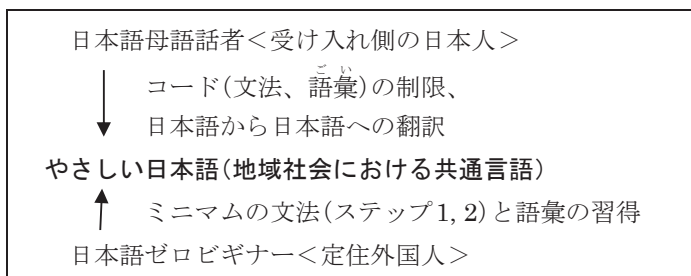
すが、岩田(2010)その他の研究結果から、英語がその役には立たないことが明らかになっていきます。

共通言語の第二の候補は、日本語母語話者が何の調整も加えない日本語ですが、これも不適當です。それは、こうした立場を採ることは、外国人を語学能力だけで判断することを意味し、「多文化共生」という考え方に合致しないからです(上記のように、日本語母語話者が何らかの理由で海外で生活しなければならなかった際に、自らの能力をその国のことばができるかどうかだけで判断されたらどのように感じるかを考えてみてください)。

そうすると、論理的に考えて、地域社会の共通言語が生まれるとすれば、それは、日本語母語話者が一定の調整を加えた日本語、すなわち、〈やさしい日本語〉しかあり得ないこととなります。その場合のモデルは、図4のようにな

ります。
 ただし、図4は、共通言語ができるとすれば、の話であり、勝手にそうなるというものではありません。このモデルが実現するかどうかは日本語母語話者の意識次第なのです。

図4 地域社会の共通言語と〈やさしい日本語〉



6・3 地域型初級としての〈やさしい日本語〉

やさしい日本語

第三の候補は、地域の日本語教

室で行われる日本語教育(地域型日本語教育)の実情に合った初級文法シラバス(文法項目の種類と提出順をデザインしたもの)という側面です。

戦後の日本語教育の流れをごく簡単に概観すると、大学などの高等教育機関で本格的に日本語教育が行われるようになったのは1960年代からで、当初は、日本語教育は専ら大学の留学生別科(後には留学生センター)や民間の日本語学校で行われるだけでしたが、1990年代から、地域の日本語教室でも日本語が教えられることが多くなってきました。

前者のタイプの日本語教育を学校型日本語教育、後者のタイプを地域型日本語教育と呼びますが、両者の違いは表1のようにまとめられます。

表1のように、両者はさまざまな点で性格が異なりますが、最も明示的な違いは、学習にかけられる時間です。一般に、初級修了ま

表1 学校型日本語教育と地域型日本語教育

	学校型	地域型
参加者間の関係	教師-学生(契約関係) 教えるのはプロ	学び合い 教えるのはボランティア
滞在目的	留学	技能実習、就業、結婚など
標準授業時間数	週20時間(初級)	週2時間(1回当たりの時間)

では約300時間必要とされていますが(旧日本語能力試験3級合格水準)、学校型日本語教育(学校型)の集中教育では、これは週20時間(1日2コマ×5日)×15週で達成可能であり、難しい目標ではありません。しかし、学習時間が週1回2時間が標準である地域型日本語教育(地域型)で、学校型と同じやり方を採ったとすると、

300時間消化するには、1回2時間×50週として、3年もかかってしまう計算になります。これはそれだけでも大きな問題ですが、問題はそうした算術的なことだけではありません。

学校型の集中教育で通常行われているのは、文型積み上げ式という教授法です。これは、その前の課までの語彙と文型のみを用いて、その課の文法内容を教えるというものであり、毎日授業が行われる集中教育では有効ですが、週1回しか学習機会がない地域型に不向きです。なぜなら、週1回の授業の度にそれまで学んだところまでを頭に入れるというのは、記憶への負担度が高いだけで習得の効率が著しく悪いからです。

以上のことから、地域型には学校型とは異なる独自の初級の文法シラバスが必要であることが分かります。こうした文法シラバスを「地域型初級」と呼んでいます。

地域型初級を具体的に考える上

で考慮しなければならないのは、初期日本語教育の公的保障の対象ということから求められる「母語でなら言えることを日本語でも言える」ことを保障するという点です。このことを保障し、かつ、地域型日本語教育の実情に即した文法シラバスを「ミニマム(最低限)の文法」と呼んでいます。

ミニマムの文法は初級前半に当たるStep1と初級後半に当たるStep2からなります。それぞれの具体的なリストは資料のとおりで、これらを教材化したのが『ほんごこれだけ!1、2』(ココ出版)です。

7. バイパスとしての 〈やさしい日本語〉

次に、外国にルーツを持つ子どもたちとことばの問題について考えますが、子どもたちの問題を重視すべき理由は、大きくは次の二つです。

第一の理由は、子どもたちが来日した理由です。

彼／彼女らの親は自らの意志で日本にやって来ているわけですが、彼／彼女らは通常、自らの意志で日本に来たわけではないにもかかわらず、日本で生きること余儀なくされています。そうであるなら、そうした子どもたちが、日本の中で自己実現できる機会が保障されるように尽力するのが日本語教育という観点から重要であると言えます。

第二の理由は、これからの日本を作る人材として子どもたちをとらえる必要性です。

前号で述べたように、30年後の日本社会のあり方を考えた場合、日本という国を「日本人」だけで作っていくことは困難であり、「日本人」と「外国人」とが共同で日本を支えていくという考え方を取ることが、「人道的humanistic」にも「経済的(ないし、功利主義的pragmatic)」にも重要である

と考えられます。

そうした立場に立った場合、重要になるのは子どもたちということとなります。つまり、外国にルーツを持つ子どもたちが、日本社会の中で日本語母語話者の子どもたちと対等に競争して、自己実現できるような環境を実現できるか、それとも、彼／彼女らが、職業選択などにおいて常に低い地位に追いやられるかは、今後の日本社会がどのように発展できるかの大きな鍵を握っていると考えられるのです。

外国にルーツを持つ子どもたちが「まっとうに努力すれば」、日本語母語話者の子どもたちと同様の成功の可能性を持てるようになり、外国にルーツを持っていることが日本社会の中で肯定的な評価を得られるようになれば、次のような効果が生まれると予想されます。

その一つは、日本国内に多様な文化が形成されることです。さら

に、そうした子どもたちは少なくとも二つの文化を背負っている中で、彼／彼女らのそうした文化的背景や言語的能力を活かせれば、企業にとっても、これまで関係を持っていなかった国や地域との新たなビジネスチャンスが広がる可能性があり、人口減少によって危機的状态を迎えつつある地域経済にとっても、活性化の起爆剤になる可能性が高いと言えます。

以上のような点から、彼／彼女らが日本語母語話者の子どもたちと対等に競争できるための条件を、言語的に保障することは重要な意味を持っていると考えられるのです。

ただし、外国にルーツを持つ子どもたちが日本語を母語とする子どもたちに対して、日本語能力の点で大きなハンディを負っていることは明らかであり、そうであるとするれば、彼／彼女らの日本語習得に「バイパス」が必要であることもまた明らかです。

それでは、「バイパス」をどのように作ればよいかということですが、これに関しては、成人の定住外国人に対する目標である「母語でなら言えることを日本語でも言えるようにする」に即した文法シラバス(文法項目の選定および配列)をもとに、その内容を拡張していくという手法を採ることが望ましいと言えます(庵2015b 参照)。

また、同様の「バイパス」が必要な対象に「ろう児」がいます(安東・岡2019 参照)。

8. 日本語母語話者のための 〈やさしい日本語〉

ここまでは、「マイノリティ(少数派)のための〈やさしい日本語〉」を見てきました。

マイノリティに対する言語保障は〈やさしい日本語〉の極めて重要な役割ですが、〈やさしい日本語〉は、マジョリティ(多数派)で

ある日本語母語話者にとっても重要な意味を持っています。ここではこの点について見ていきます。

8・1 日本語表現の鏡としての

〈やさしい日本語〉

日本語母語話者にとって、日本語を用いて行う最も重要な言語活動は、「自分(だけ)が知っていることを相手に伝えて、相手を自分の考えに同意させる」ことだと考えられます。

これは、大学などでは「論文」や「口頭発表」などに、企業では「就職面接」や「(各種)プレゼンテーション」、「商談」などに、日常生活では「自治会の活動」などに当たりますが、日本の学校教育では、「意見文」、「感想文」などの形で自らの意見を述べる活動は盛んに行われているものの、相手とのことばのやりとり(インターアクション)の中で、相手の意見を受け入れつつ、自らの意見を相手に認めさせるといふ活動はあま

り行われていません。

外国人を相手に「ロールプレイ」の形で、こうした活動の練習を行うことは、こうした能力を磨く上で役立ちます(宇佐美2013、2014)。それは、日本語母語話者同士では、言語自体で相手を説得できたのか否かがはっきりしないのに対し、外国人は、分からないところをはっきり指摘するため、ロールプレイの「本物らしさ(真正性(authenticity))」が高まるからです。

こうしたインターアクションは、話しことばにおける〈やさしい日本語〉の実現形ですが(柳田2015)、こうしたことは、〈やさしい日本語〉が「日本語表現の鏡」として、コミュニケーション力を高める役割を担い得ること、及び、日本語母語話者にとっての〈やさしい日本語〉の意義を示しています。

8・2 「公平な耳」の必要性

6・2で見たように、マジョリティである日本語母語話者とマイノリティである定住外国人の間に共通言語ができるとすれば、それは〈やさしい日本語〉でしかあり得ません。

こうした共通言語ができること自体が容易なことではありませんが、その過程で、これまでの「日本人」だけが使ってきた日本語とは様々な点で異なる日本語が使われるようになることが予想されま

す。こうした状況において重要な理念の一つが、土岐(1994)が指摘する「公平な耳」というものです。次の引用を見てください。

(1) 日本の大手自動車会社の工場長がタイからの技術研修生に会った時、「わたし：じどうチャ：」などと話しているのを聞いて、引率の日本人に、この人達はほんとうに仕事ができるの

か」と心配そうに言ったというが、これなどは、「わたし」や「じどうチャ」などという発音の仕方が、日本語では幼児の話し方に似ているところから、勝手に人格や能力の判断にまで結び付けて出された反応であったとまずは解釈できよう(土岐1994)。

ここで問題となっているのは、タイ語では「し」と「ち」を区別しないが、日本語にはその区別があるということです。客観的な事実はそれだけのことに過ぎないにもかかわらず、実際はそれが差別につながっているのです。

しかし、これの「逆」に当たる事例はすぐに見つかりません。

日本語にはサ行の「し」[ʃi:]は存在せず、「し」はシャ行の「ʃi:」です(庵2012)。このように、「[ʃi:]」の前では「[s]」「[j]」の区別がなくなるため、“She sees a sea.”を意識せずに「シーシーズアシー」

と発音すると、[ʃi:ʃi:ʃi:](she[ʃi:]が3人!)となってしまいますが、これは英語話者には極めて不自然な発音に聞こえると思われれます。

ところで、「外国人」に対するのと同様の差別は、歴史的には「方言」話者に対しても続けられてきました(毎日新聞地方部特報版1998、庵2013)。

こうした様々な差別意識をなくすには、「方言」や「外国人の日本語」を含む様々な日本語を等しく日本語のバリエーションとして聞ける「公平な耳」が必要だというのが土岐(1994)の趣旨です。

9. マインドとしての 〈やさしい日本語〉 —真に必要なもの—

ここまで、われわれの研究グループの研究の発展の方向に沿って、〈やさしい日本語〉研究の多様な側面について紹介してきました

だが、「いい」では〈やさしい日本語〉を支える「理念」について考えてみたいと思います。

9・1 「技術」より重要なこと

〈やさしい日本語〉は、マイノリティのためのものという認識が強くとすれば書き換えや言い換えの「技術」に関する問題であると認識されがちです。

確かに、公的文書やNews Web Easyの書き換えなどをプロが行う場合には、一定の制約の下で書き換えることが書き換えの質を保証する上からも重要です。

しかし、これらはあくまで「特別な」場合であり、定住外国人と一般の日本語母語話者の間での〈やさしい日本語〉では、こうした技術的な面を意識する必要はありません。

重要なのは、相手が何を言おうとしているのかを理解し、自分が相手に何を伝えたいのかを常に意識しながら、自らの日本語表現を

書き換えたり言い換えたりすることです。

9.2 「お互い様」の気持ち―

マインドの重要性―

このように、〈やさしい日本語〉にとって重要なのは「技術」ではなく、重要なのは考え方(マインド)です。こうした「マインド」を一言で言うくと、「お互い様」の気持ち」ということになります(庵2019a)。

8.2で、「わたし」「じどうチャ」といった発音を笑ってしまう気持ちだが日本語話者には潜在的に存在すること、しかし、それは例えば「ㇿ」と「ㇿ」の区別ができないことを英語母話者に笑われるのと同じことなのだということを述べました。

「わたし」という発音を笑いそうになったときに、もし、一歩立ち止まって、「自分が同じことをされたらどう感じるだろうか」と考えることができれば、おそらく

笑うことはないでしょう。「多文化共生」はそうしたところから始まると私は考えています。

9.3 「バリアフリー」は誰の

ため？

これと同様のことが「バリアフリー」についても言えます。バリアフリーというのは、全ての人が社会に参加できるための手段ですが、これはともすれば、「障害者」というマイノリティのためのものと考えられがちであり、そのために、「バリアフリー」のための予算が付きにくいといった事例も見られます。

しかし、人は怪我をしたり、歳を取ったりすれば移動困難者になります。つまり、「健常者」と「障害者」は一時的な違いに過ぎず、誰もが「障害者」になる可能性を持っているのです。そのことが理解できれば、「バリアフリー」は、「マイノリティである誰か」のためのもではなく、「いつかマイ

ノリティになるかもしれない私」のために必要なものであると考えることができるはずですが。こうした「情けは人のためならず」という古諺こげんの本来の意味(情けは他人のためのものではなく、自分自身のためのものである)こそが、〈やさしい日本語〉の理念を体現しているのです。

10. おわりに

―〈やさしい日本語〉を成り立たせるもの―

前号から2回にわたって、〈やさしい日本語〉について、様々な観点から考えてきました。

私自身が最も訴えたかったのは、〈やさしい日本語〉はある決まった形のものではなく、〈やさしい日本語〉にとって最も重要なのは、相手の立場に立って考えられる「お互い様の気持ち」であるということなのです。

実は、〈やさしい日本語〉とい

うのは何か特別なものではなく、私たちがごく日常的に行っているものなのです。

例えば、相手が耳が遠い人であれば、大きな声でゆっくり話しますし、子どもであれば、子どもに分かるようにことばを言い換えまです。では、なぜそのような「調整」を行うのでしょうか？それは、「相手に自分のことを知ってほしい」「相手のことを知りたい」という気持ちがあるからです。外国人に対する場合でも、同様の気持ちがあるかどうかがまず重要であり、そうした気持ちがあれば、自然に「調整」を行うようになります。逆に、いくら「技術」を覚えても、そもそも相手と関わりたいという気持ちがあれば、へやさしい日本語にはなりません。このことから、重要なのはまずは「マインド(考え方)」であり、言い換え、書き換えの技術はその次であることが分かります。

参考文献

- あべやすし(2015)『ことばのバリアフリー』生活書院
- 安東明珠花・岡 典栄(2019)「ろう児と〈やさしい日本語〉」庵ほか編(2019)所収
- 庵 功雄(2012)『新しい日本語学入門(第2版)』スリーエーネットワーク
- 庵 功雄(2013)『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵 功雄(2015a)「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵・山内編(2015)所収
- 庵 功雄(2015b)「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵・山内編(2015)所収
- 庵 功雄(2016)『やさしい日本語—多文化共生社会へ—』岩波新書
- 庵 功雄監修(2010)『にほんごこれだけ! 1』ココ出版
- 庵 功雄監修(2011)『にほんごこれだけ! 2』ココ出版
- 庵 功雄(2019a)「マインドとしての〈やさしい日本語〉」庵ほか編(2019)所収
- 庵 功雄(2019b)「外国人との対等な関係の構築に必要とされる〈やさしい日本語〉」『Journalism』2019年5月号、朝日新聞出版 <http://www12.plala.or.jp/isaoiori/journalism1905.pdf>
- 庵 功雄監修(2010, 2011)『にほんごこれだけ! 1, 2』ココ出版
- 庵 功雄編(2020)『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版
- 庵 功雄・イ・ヨンスク・森 篤嗣編(2013)『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 庵 功雄・山内博之編(2015)『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 庵 功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編(2019)『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版
- 岩田一成(2010)「言語サービスにおける英語志向—「生活のための日本語:全国調査」結果と広島の実例から—」『社会言語科学』13-1
- 宇佐美洋(2013)「「やさしい日本語」を書く際の配慮・工夫の多様なあり方」庵・イ・森編(2013)所収
- 宇佐美洋(2014)「外国人にわかりやすい文書」を書くための配慮—「やさしい日本語」の作成ルール」の効果とその活用—」『カナダ日本語教育振興会(CAJLE) 2014年次大会Proceeding』<http://www.cajle.info/conference-proceedings/cajle2014-proceedings/>
- 土岐 哲(1994)「聞き手の国際化」『日本語学』13-13
- 毎日新聞地方部特報版(1998)『東北「方言」ものがたり』無明舎出版
- 柳田直美(2015)『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して』ココ出版

付録

ステップ1の文法項目	
名詞(N)文	～はN・naAです。／N・naAですか？／N・naAでした。
ナ形容詞(naA)文	～はN・naAじゃありません。／N・naAじゃないです。
イ形容詞(iA)文	～はN・naAじゃありませんでした。／N・naAじゃなかったです。
動詞(V)文	～はiAです。／iAですか？／iAかったです。 ～はiAくありません。／iAくないです。／iAくありませんでした。／iAくなかったです。 ～はVます。／Vますか？／Vました。／Vません。／Vませんでした。 <応答>王さんは主婦ですか？ はい、そうです。／いいえ、違います。 <応答>昨日、会社に行きましたか？ はい(行きました)。／いいえ(行きませんでした)。
助詞	～を、～の(所有格)、～の(準体助詞)、～の(昨日の洗濯をしました)、～に(時間、行き先、場所、相手)、～で(場所、手段)、～と(相手)、～が(目的語)、～から、～まで(時間)、～と(並列助詞)、～も、～よ、～ね
疑問詞	誰、何、何〇(何時、何年、何歳、何個)、どこ、いつ、どれ・どっち、どう、どうやって
指示詞	これ／それ／あれ、この／その／あの+N、こっち／そっち／あっち、 ここ／そこ／あそこ
モダリティ(対事)	たぶん～です／ます。(概言)、バナナを食べたいです。(願望)
接続詞	A。それから、B。／A。それで、B。／A。そのとき、B。
その他	数字、曜日、…に～があります／います。、～には弟がいます。(所有動詞「いる」)

ステップ2の文法項目	
産出レベル	
形態論	～て(テ形)、～た(タ形)、辞書形、～ない(ナイ形)
助詞	～が(主語)、～から、～まで(場所)、しか(～ない)
形式名詞	こと、もの
文型	～は…ことです。／～たり～たりします
ボイス	～ことができます、～く／～に／～ようになります
アスペクト	～ています、(まだ)～ていません、～たことがあります
モダリティ(対事)	～と思います
モダリティ(対人)	～てください・～ないてください(依頼)、～ないといけません(当為)、 ～てもいいですか(許可求め)、～たいんですが(願望・許可求め)
複文・接続詞	～て(連続、理由)、～てから(継起)、～とき(時間)、～たら(条件) ～けど(逆接)／～。しかし、～ので(理由)／～。なので、 ～ために／～ように／～ためのN(目的)
その他	～んです。 どうして…んですか？— ～からです。
理解レベル	
モダリティ(対人)	～てもいいです(許可)、～てはいけません(禁止)、～ましょう(勧誘)、 ～たほうがいいです(当為)、～なさい(命令)
その他	昨日買った本(はこれです。)(名詞修飾) 田中さんが来るか(どうか)(教えてください)(名詞化)